

佛教大学 四つの誓い

福原隆善

失礼を致します。引き続き大変お疲れの中を私のような者の話を聞いていただくということで大変恐縮に存じます。先程は池見先生の方から、四十年あまりの永年積み重ねてこられた深い学問の分野のお話をいただき、大変面白くためになるお話をいただきました。私は三十年ちよつとになりますけれども、三十年ちよつとここにおらせていただいてこれだけの話しか出来ないのかというような話になるかと思えますけれども、この度の最終講義に当たりましては、先程の池見先生のは非常に学問的に究められたお話でありましたけれども、私は今、学部の新入生から大学院の学生の講義を担当させていただいておりますが、その中で佛教大学に入つてこられた新しい学生さんにお話をさせていただく「自校教育」というのを担当させていただいております。本来なら、池見先生のような自分の専門のお話をさせていただくべきではあるかと思うのですが、自校教育をやっている中で大変気になっておりますことがやはり「建学の精神」ということでありましたので、よい機会をいただきましたのでこの建学の精神をめぐる私案といえますか、そうしたものをお話させていただいて最終講義とさせていただきますと思っております。

建学精神というのは何かというと堅苦しい話になりますが一回生に話をするわけですので、出来るだけ分かりやすくとは思ってはおりますけれども、まことに心許ないことではございますが、少しまとめたものをプリントさせていただきます。

建学精神といいますと当然大学なり教育機関を設立する基本理念になっていることは申すまでもございません。そのプリントにありますように、最初に建学精神に考えたものを六つあげておりますが、実際には「四つの誓い」としております。六つあるではないかということになるのですが、少しお話を進めてからに致しますけれども、佛敎大学には学則第一条に、「仏敎精神により人格識見高邁にして活動力ある人物の養成を目的とし、世界文化の向上、人類福祉の増進に貢献することを使命とする。」とこういふふうに謳われております。はつきりと仏敎精神によつてこの敎育研究がなされているということでございます。佛敎大学といふところの建学精神は佛敎精神であるということとは容易に想像がつくのでありますけれども、ところがその「仏敎」といふのは一体何なのか、「仏敎精神」といふのは一体どういふことかと言つたときに大変難しい問題になつてまいりますし、分かりにくい世界でもあります。ややもすると、この大学でも仏敎精神に基づいて敎育研究しておりますと言つてしまえば、それが仏敎精神で行われているかのごとくに受け止められてしまいます。しかし実際にはよく分からないというようなところがあつたりもしますので、自分が考えております私案を申し上げて、出来ましたらこの大学で分かりやすくしたものをお作りをいただきたいと思つています。

そこで自校敎育のときに申し上げているのですが、まず「大学」といふのはどういふところであるのか、ということでございますけれども、人は生まれてから大学生になるまでに「呼び名」が変わります。最初は「乳児」とか「幼児」といふような呼び名で呼ばれ、それが幼稚園なり保育園に行くようになれば「園児」といふふう呼ばれ

ます。そして小学校に入れば「児童」という名前に変わり、中学校、高等学校に入りますと「生徒」というふうに呼ばれます。そして専門学校も含めて大学に入りますと「学生」と呼ばれます。大学生が大学に入っても、大学生のことを「生徒」というふうに言っている人がいるのですけれども、やはり大学というところは「生徒」ではなく、「学生」というふうに呼ぶべきであると思っております。それは何故かといいますと、「生徒」から「学生」と名前が変わるのには大変重要な意味があると私は思っております。「学生」というのはやはり自分で何もかもやっていく、自分が責任をもって学んでいく、そういう姿勢をもったものを「学生」と呼ぶのだと思っております。当然、高校は今のところ義務教育ではありませんがちよつと義務教育化されている感じがありますが、大学というところは必ずしも義務教育ではありませんので、やはり学問の場に進みたいということから大学というところへ入ってこられた、ということであればやはり自らの意志において学ぶということでなければなりません。他人から勉強しろと言われて勉強するようなところではなく、そういう意味では全て自らが責任をもってするところがいわゆる大学の「学生」である、という意味で「大学」というのは、大人の学校であり、子どもの学校ではありません。そういう大人の学校として大人としての学び方というものを心がけていくことが「学生」という身分であるということになります。

仏教にも「学生」という言葉がつかわれております。仏道修行する人を仏教では「がくしょう」と呼んでおりますけれども、「学生」といって法然上人なんかも呼ばれておりますし、伝教大師の『山家学生式』というものもございます。そうしたことから見ますと、仏道修行に入る「学生」というのは人から言われて仏道修行するものではありません。自らの意志において仏道修行の場に入り、自らの意志で修行を進めていく、師匠から修行せよ修行せよと言われて修行するものではなく、いわゆる仏道修行者としての「学生」であり、そのことから見れば、当然大

学の「学生」というものも、よく講義で静かにして下さい、とか言つて静かにするところではなく、自ら学びに来た者が、今しゃべるべきときであるのか、そうでないのか、ということとは心がけて下さい、というようなことを申しながら続けておりますけれども、いわゆる大人の学校というのが大学であるという、そうしたことをまず認識をもつていただくということで、そうした話から入らせていただいております。

仏教といえますと、入りたての一回生の方に「仏教」と聞いてどういふことを思いますか、と聞きますと、かなりの人が「暗い」とか、「じめじめしてる」とか、「うっとうしい」といふような、そういったマイナスイメージで捉えます。たまには「厳しい」「坊さん」「観光」とか「お寺」とか、そういうようなイメージで語つてくださる方もいるのですが、これは、二十歳前後の学生さんだけがもっているイメージではないと思います。何となく、仏教と聞くとお葬式や法事のイメージがあつて、人生の最終的な儀礼に関つているのが仏教であると思われています。一方、キリスト教は暗れやかな行事があつたりして最近結婚式もキリスト教式でする人が多いですが、何となく明るいイメージがあつて、仏教はちよつと暗いイメージで捉えられているといふようなイメージが強いように思います。

しかし、それは仏教の本当のあり方を知らないといひますか、テレビやいろいろなことの影響が強くて、なかなかイメージを変えていただけない。それは私どもの責任であると思ひます。そういうことで仏教の正しいイメージを、少なくともこの大学で学んで来る人にももつていただきたい、といふことから話を始めておりますけれども、仏教というのはいはり「仏の教え」であり「仏になる教え」であるといひれます。キリスト教やイスラム教のような世界に名立たる宗教は神になることは出来ません。いわゆる、絶対の全知全能の神を一心に信じているところから始まります。そしてその神が示したといふ真理の言葉といひれる聖書やコーランに説かれてはいる通りに生活を

することが求められます。いわば、片手にちよつと持てるくらいの分量のものに真理の世界が示されています。ところが仏教というのは八万四千の法門とか、大藏経とか言われますように、大変たくさん教えがあつて、ちよつと片手で持てるくらいの分量では収まりません。それは一体どうしてなのだろうということになるのですが、当然要点よく真離の世界を示した聖書等とは違つて、お釈迦さんの教えというものは、真理そのものというよりは真理の世界に至る方法、手段を説いていただきました。その手段というのはやはり私どもの能力や性格、いろいろありますので、そうした能力、性格に合わせてお釈迦さんが説いてくださったものがございます。京都の街から見ると比叡山が象徴的に見えますけれども、比叡山の上が真理の世界であるとすれば、そこへ行く方法を教えていただきたい。仏教では既に言葉や考えで表したものは真理そのものではない、といった考え方も持っているかと思ひます。すなわち、そういった世界は言葉や考えでは表せない、言葉や考えで表したものは真理そのものではない、そういった世界のものでございますので、言葉として表されたものは全てそこに至る手段ということになります。そうすると、比叡山の上は真理の世界でありますけれども、ここから歩いて行きなさいというのがその教えであります。そんなつらいことはとても出来ないという人には、それではドライブウェイがありますから車に乗つていつでもよろしいということになり、また少し苦勞もしたいし、そうかと言つて全部歩くことは出来ませんという人には、それでは麓まで歩いてあとはケーブルで上がらなさいとか、あるいはヘリコプターで飛んで行きなさいとか、いろいろな方法があるわけがあります。どの方法をつかつてても比叡山の上上がるということが目的でありますから、その方法に良い悪いはありません。どの方法でもいいわけで、あえて言えば自分に合った方法が一番いいということになるかと思ひます。そういうわけでお釈迦さんは能力や性格にあわせてたくさんな教えを説かれました。

その教えを佛敎大学に来てどうして聞かなくてはならないのかと、というような話になつてくるかと思ひますが、

なぜ聞いてほしいのかを示したいと思います。

お釈迦さんはお生まれになったときに「天上天下唯我独尊」とおっしゃったといわれております。天の上にも天の下にもこの私が生きた尊い、とありますけれども、それは他の方は尊くないという意味ではなくて、天の上にも下にもここにいる私は私ひとりしかない。どこを探してもここにいる私は私ひとりしかない。だからこの私にとって私は最も大事な尊い存在なのだということです。当然他の人もひとりしかないのですから一人ひとりが尊いのだということです。こういう意味に理解すべきであろうと思っております。昔、パーマンという漫画があったのですがご存知の方はおられますかね。若い人はあまりご存知ないかもしれませんが、主人公が人形を持っておりますが、その人形の鼻を押さえますともうひとりの自分が現れてくれるのですね。そしていろんな難問を解決してくれる、そういう漫画がございました。私どもはやはりそういうわけにはいかないのですね。いくら人形を持っていて鼻を押さえてももうひとりの自分が出てきてくれませんので。ここにいる私は私ひとりしかない。だからこそ私は私にとっても尊い存在なのだ、こういうことになります。また他の人もひとりしかないから一人ひとり尊いということになるかと思えます。

さらに、お釈迦さんがお亡くなりになる直前にそれを察知したお弟子さんたちが非常に心の不安を訴えました。今、私たちはお釈迦さんに亡くなられたら困ります。私たちはお釈迦さんを頼りに生きてきました。今、お師匠さんが亡くなったら私たちは誰を頼りに生きていけばよいのか、と心の不安を訴えました。それに対してお釈迦さんは「自らを灯にせよ」「法を灯にせよ」とおっしゃったと言われております。これは一体どういう意味なんでしょう。「自らを灯にせよ」ということは、「自分の人生は自分が責任をもって歩め」ということとございます。自分の人生を他人に歩んでもらうことは出来ません。当然、他人の人生を歩んでもあげることが出来ません。私の人生は私

が責任をもって歩まざるをえない、そういう意味に解釈すべきであります。「法を灯にせよ」というのは、「法」というのは仏教の専門から言うといろいろと難しい意味をもっているのですが、平たく言えば、真実、真の世界、というくらいに受けとめておきたいと思えますが、真実の世界に自分の身をおいて自らの人生を自らが責任をもって歩め、とこういうことをおっしゃった。「他によるなかれ」というのは、他人はどうせ当てにならないから、そんなものを当てにしてはいけなとか、そういう意味ではなくて他の人に自分の人生を歩んでもらえないという意味でございます。自分の人生は自分しか歩めない。だからどんなに自分が頼りなく思っても私が責任をもって自分の人生を歩む、そういうことを教えられました。

仏教では「不殺生」ということを説きます。この「不殺生」ということの意味は当然、人の命を大事にしなければなりません。他の命だけではない、いろんな動物、あるいは米粒ひとつ、水一滴もこの私の命を支えています。そういうことから言えば、どんなものも命をもっているのだから大事にしなければならぬということとはひとつ言えるかと思うのですが、もつと大事なことは主体的に受けとめていくべきであると思えます。私が私の命を殺していないか。私は本当に私を生かしているのか。私を生かすのは私しかない、私の人生は私しか生かせない、私を生かすか殺すかは私自身の生き方にかかっている、だから私を本当に責任をもって生かしていかなければ、私を殺していることになる、こういう意味に受けとめていくべきであろうと思っております。私の命は親がいなければ誕生しない、その親もまたそれぞれの親がいなければ誕生しない、私ひとりの命は永遠の過去に遡っていきます。永遠の過去からのどの縁ひとつ切れても私どもはここに存在することは出来ません。しかも、生まれてからもまわりの空気や太陽や水や土など、また動物や植物や石ころひとつ水一滴まで私の命を支えています。まわりのそういうものがなければ一瞬の命も支えることは出来ません。そういう意味で私の命を支える全てのものを大事にしないとい

けない、ということになります。私が私を生かしていくことはまさにいわゆる「自灯明」「法灯明」であり、「不殺生」という意味を重く受けとめていくべきでなかるうかということでございます。

そういう意味で大学に入ってこられたばかりの若い学生さんにこそ、自らを本当に生かす智慧を仏教から学んでいただきたい。仏教というイメージはお葬式や法事をするのが仏教のように思われています。仏教というのは目覚めようという宗教でございますから、こういう言い方をしてはいけないのかもしれませんが、神の支配を受ける宗教ではありません。自らが自らに目覚めていく、その智慧を教えているのが仏教であり、人間を解放する宗教です。ということから、自らを最大限に生かしていく、そういう在り方をこの大学に來た以上は是非求めてもらいたい。こういう話を自校教育の方でさせていただいております。

そこで、建学精神として最初に四つの誓いといいながら六つあるわけですけれども、簡単に項目だけ示しますと、まず「慈しみの心で生活する」慈悲の精神、「内なる自己を知る」懺悔、さらに進めて還愚の精神、「すべてに感謝する」感謝の精神、「自己をきわめる」精進、努力の精神、「平等に完成する」平等の精神、「共に生まれかわる」共生の精神、というようにさせていただきたいと思っております。仏教は私を対象とし、自分を信じたり疑ったりして自分さがしの教えと違ってよいと思えます。仏教には自己のみの完成を目指す教えと、大乘仏教と違って他と共に完成を目指す教えがありますが、法然上人の教えは釈尊の大乘精神を汲んで共に完成を目指す教えです。大乘仏教の基本精神は「四弘誓願」といい、四つの誓いによって修行することになりますから、佛敎大学の仏敎精神の基本的枠組も四つの誓いによって示すこととします。「四弘誓願」とは、これはいわゆる何故仏道修行に入るのか、何も無意味に入るわけではありませんので、仏道修行に入ることとは、こういう目的、こういうふうにしたいたから仏道修行に入ると意味で、その時に私はこういうことをやりたい、またはやります、という願いと云いますか、

誓いと言いますか、そういうものをはじめにおこしていくことが求められております。大乘仏教という基本的な精神の誓い、誓願が四弘誓願といわれています。誓願には「総願」と「別願」というのがございまして、「総願」というのがこの「四弘誓願」に当たります。これは、誰もが共通におこす誓願で、それを「総願」というふうにいいます。個別的に一人ひとり違うものを「別願」ということになります。阿弥陀さんの四十八願というのは「別願」になります。あるいは薬師さんの十二願、あるいはお釈迦さんの五百の大願、あるいは普賢菩薩の十大願、そういったものは全部違っているんですね。ですからそれぞれの修行者によって違った誓願が建てられます。

しかし、共通なのがこの「四弘誓願」というものでございます。最初を見ていただきますと、「慈しみの心で生活する」。一つひとつ説明を簡単にさせていただいておりますけれども、まず慈悲の精神、四つの誓いの第一は「衆生無辺誓願度」といって「迷う人は数限りないけれども共に理想に向かいます」とあります。これは大乘仏教の基本精神の一つであって、自分の完成よりも、まず他人のことに心をめぐらしましょうということでもあります。迷い苦しむ人は数限りなく存在します。その一人ひとり残さず慈悲の精神で理想の世界に向かおうということです。そこには他を思いやる慈しみの心がなくてはなりません。大乘仏教というのは、そのように自分の完成も大事だけれども他の完成を共にしていこうと、利他の精神がまず示されます。例えば、観世音菩薩とか地藏菩薩という菩薩さんがおられますが、菩薩という以上、まだ修行中、未完成なのです。如来とか仏と言われるのは完成者でございませぬけれども、菩薩はまだ修行中、悟りを求める人というところでございましてまだ未完成の状態をいいます。私どもも、もし悟りを求めようとすればそれは菩薩の道を歩むことになります。もちろんまず他人のことに心をめぐらすような心を持つ必要がありますけれども、私どももそういったことをおこして仏道修行に入れば、私どももまた同じ菩薩と言われることとなりますが、私どもが言われる菩薩は地藏菩薩や観音菩薩のような存在を菩薩と言

っているとは異なります。これは程度が大分違うのですね。今修行に入ったばかりで観音さんと同じには出来ません。それでは観音菩薩等は何故、菩薩でおられるのか。これは、「自ら度せざるにまず他を度す」ということを誓っている菩薩なので、自分の完成を一番あとにまわして他の人をまず完成させていく。そういう意味で大乗仏教といえますか、あるいは菩薩道の理想像として、他の人をたくさん救って、そして最後に自分が完成しようということをおられます。ところが、救っても救ってもあとからあとから迷いの衆生が出てくるので未だに菩薩でいらつしやるということです。その意味で大乗菩薩の極みみたいな菩薩という方でございます。そういう菩薩精神というものをまずもつことが最初に誓われております。自分のことも大事だけれども、他人のことにまず心をめぐらせていく、そういう意味でこれが大事な最初に誓われています。ということは、あとの三つは自分が対象になっていきますけれども、その根底にはいつも他人のことにめぐらすというのがなければならず、そういう意味で最初にこのことが述べられているということです。

二番目がですね、「内なる自己を知る」ということで、「懺悔、還愚の精神」で、「煩惱無辺誓願断」といって「悪い心のはたらきは数限りないけれども、全てを断ち切ります」という誓いです。最初の誓いはまず他に心をめぐらしますが、ここからの三つの誓いは自己のための誓いです。眼は構造上、外界を見るようにできていますから、外界のことはよく見え、他人の欠点などもよく解ります。ところが自己を内省しますと、何と自己中心なことばかりで、善い心はあまり起きません。法然上人ほど自己を厳しく内省された方はありません。法然上人は単に醜い心をもった自己を内省されただけにとどまらず、さらに徹底して還愚ということばで表現される境涯に到達されました。還愚とは自らの愚かさに目覚めることによって思いあがった傲慢な心を徹底的に打ち砕いて没我にすることであります。還愚は単に学問もしないで愚かになることを勧めることではありません。真実に向かうときは自らの

小ざかしい才覚を捨てよということでもあります。法然上人のたいへん大事な精神として、常に自らを見つめ、さらに愚かさに目覚めるということでもつていくということが大事なことでございます。法然上人は「智慧第一」だとか、あるいは「ふかひろの法然房」というふうな他の方々からは非常に称賛の言葉で言われた方でございますけれども、それにも関わらずご自身は大変厳しく自己凝視されました。ついつい自己中心的な考え方になってしまうということはやはり慎まなくてはなりません。

それから次が三番目でございますが、「すべてに感謝する」「感謝の精神」で、第三は「法門無尽誓願知」といつて「導きの方法は数限りないが、全てを学びつくします」という誓いです。人は永遠の過去から無量の縦の縁によって生まれ、また生まれ出てからも周囲の無数の横の縁によって生かされて今の命のあることにまず感謝すべきであります。過去からのまた周囲のどの縁一つ切れても存在することはできません。ところがそのことに気づかず自己中心的なものの考え方の迷い苦しみの中にいる現実があります。釈尊は迷いの世界に生きる人々を覚めさせるために、人々の能力や性格に合った多くの教えを説き示されました。苦しみの世界から抜け出し自己の命を生かす仏の教えに出会ったことに感謝すべきであります。法然上人は阿弥陀仏の救済のはたらきに出会ったことを喜びの喜びと言っておられます。悪い心を取り除く方法というのは数限りなく示されておりますが、これを全て学び尽します、とこういう誓いでございます。ただ法然上人は、ご自身では学び尽しておられたと思われましても、ご自身の内省から出るものは何一つ極めることが出来ないという立場に立っておられて、ただただ阿弥陀仏の救済のはたらきにする教えを見つけ出されました。仏教は「三学」を修めることにあります。まず、仏さんの戒めをよく守るということで、いろいろな戒めがあります。お釈迦さんははじめ「八正道」という八つの正しい道を説かれました。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定という八つの正しい道を行いなさい、そうすれ

ば覚めの世界に入れますよと説かれました。正しい行いをしましょう、正しい生活をしましょう、正しい努力をしましょう、とこういうことを八つ説かれましたけれども、ところがこれは非常に分かりにくいのですね。「正しい」という内容がよく解りません。私もしばらく幼稚園の方におりましたけれども、ご存知だと思いますが幼稚園の子どもにも仏教の基本である仏法僧の三宝に帰依するという、そういうことを三歳から五歳の子どもに分かるように置き換えられたことばがあります。「仏に帰依する」というのは「明るく生きる」ということであり、「明るく元気にしようね」と言くと「はい」と言ってくれます。そして、「法に帰依する」は「正しく良い子でしようね」と言ったらこれもまた分かってくれます。そして、「僧に帰依する」というのは「仲良く生きる」ということで、明るく、正しく、仲よくするというのが仏教保育の基本理念となっております。どこの仏教幼稚園でも明るく正しく仲よくする、こういうことで保育が行われておりますけれども、幼稚園の子どもの時には特に「正しく」「良い子」というのは分かるのですね。それはどうしてなのか。それは「無分別智」がはたらいているからです。分別をしない智慧がはたらいているからです。ところが大きくなってくると分からなくなるのですね。幼稚園の時に分かったことが分からなくなってしまう。それはどうしてか。分別智をはたらかすから分からなくなるのです。一体、「正しい」とはどういうことなのか、非常に難しいのですね。どうあることが「正しい」のか。日本国憲法に沿うことかとかですね。どうあることが「正しい」かとは非常に分かりにくい世界になってしまいます。そういうことから、正しくあるということをもっと具体性のあるものにまとめたものが、「三学」というものになります。「戒」という戒めですね。ものの命を大事にしましょうとか、盗んではいけないとか、あるいは嘘をついてはいけないとか、そういう具体的なないわゆる禁止事項や積極的によいことをすることも説かれていきますが、そういう戒め事が正しくある、正しい生活、正しい行い、正しい努力とかいうようなものを具体的ににしたものとなります。その正しいあり方をも

つことよって心身共に安定した定の状態に入ります。そうすれば真理の世界を見通す智慧が開かれるということ、「戒、定、慧」というこれが仏道修行の基本にあります。仏教は智慧の宗教と言われます。智慧の眼を開くことが大事なことでございます。智慧の眼を開くということは知識を持つということではないですね。知識を積み重ねても智慧の眼は開かないですね。ですから智慧の眼を開くというのは単に知識を積み重ねていくことではありません。この間テレビを見ておりましたら天才バカボンの話をしていました。天才バカボンの赤塚不二夫さんは、お釈迦さんのお弟子さんにチューラパンダカーという周利槃特という方をとりあげられたといわれます。この人は、大変修行能力の劣った方でございました。行の一つもなかなか出来ない、なかなかものが理解出来ない、そういう箸にも棒にもかからないようなお弟子さんでしたが、お釈迦さんはお見捨てにならず、箸を一本渡して、お前は掃除をせよと言うので掃除をしていたわけでございます、掃除を繰り返し繰り返し繰り返してうちに、優秀な弟子だと言われる人がなかなか出来なかつた一つの悟りの境界を開いたと言われております。したがって、智慧の眼を開くというのは単に立派な行をすとか難しいことを理解するとか、そういうことで開かれる世界ではないのですね。それがモデルになったのが天才バカボンの掃除のおじさんです。バカボンというのはお釈迦さんのことをいう言葉ですけども、「これでいいのだ」というのは涅槃の世界だと、こういうふう面に面白いことを言っておりますけれども、そういうことで決して知識を積み重ねて開かれる世界ではないのであります。法然上人も結局知識を積み重ねても何の開きも来ない、そんなことよりただ阿弥陀仏への帰依ということになりました。この覚めを説く宗教が仏教であります。自らの力で極めていいこうという、いわゆる自力門、それに対して他力門は自らの至らなさに覚め阿弥陀さまの本願他力に帰すという教えがあります。覚めると同じ意味であります。それは「如実知見」ということであり、仏教の求めるものです。それはありのままをありのままに知り見るということであり、

そのことよって執われの心をなくし、いわゆる没我にすることにあります。それは自力であろうが他力であろうが何も変わらないことであります。例えば、一休さんの橋を渡ってはいけないという有名な話がありますが、あの一休さんの話はそういう世界をよく表しているかと思えます。橋のたもとに「はしわたるべからず」と書いてあると、目の前のブリッジの「はし」だと思ひ込んでしまいます。けれどもご存じの通り一休さんは真ん中を堂々と渡って行く。他の人が諫めたら、私は端は渡っていない、真ん中を渡っているではないかと言いました。「はし」というのをブリッジの橋と思つたのは私自身なのです。私自身がそう思ひ込んだから私自身が勝手に迷っているのです。そんなことそもそも書いてなかったらいいじゃないかということもあります。これは人生何が起こるか分からない。実際、橋の端っこに穴が空いていたかも知れないです。ですから端っこを通ると危ない。だからそういうふうを書いてあつたかも知れません。何が起こるか分からない、何が起つてもすぐに対応出来る智慧の眼を持つということ、これが仏の教えであるということになります。私が勝手に起こした煩惱で、勝手に迷っている、そういうあり方をやめましょうというのが仏の教えなのだといいことですね。自分が自分を不自由にしていく。それから自分を解放していくという、それがまさに仏教の教えだということになります。他力というのは決して単なる他人任せということではもちろんございません。

次は四番目「自己をきわめる」「精進、努力の精神」で、第四は「無上菩提誓願証」といつて「理想の世界ははるかに遠いけれども必ず実現します」という誓いであり、四つの誓いの最後の誓いです。仏教は自らの覚めを説く教えであり、ブツダとは、覚めた人という意味であります。ところが自らに覚めることは容易なことではなく、実現に向けて精進、努力することが大切です。法然上人は自らが自らに覚めることの困難なことから、愚かな自己をよく知り、愚かな自己を率直に認め、阿弥陀仏の救済のはたらきに覚められました。それはちょうどお母さ

んを求めて泣く赤ちゃんのような関係にあります。泣く声を聞いた親の側で全てがなされます。仏を呼ぶ声、念仏によって阿弥陀仏の側で全てが成就するのです。以上が四つの誓いということになります。

そして源信和尚という方の『往生要集』の「四弘誓願」には、この四つの誓いのあとに二つの偈文がさらに付いております。

五として「平等に完成する」「平等の精神」で、「自他法界同利益」といって「自他共に同じ理想を実現します」ということで、この句と次の句は、先の四つの誓いによって目指すところを示しております。すなわち先の四つの誓いの慈悲、懺悔・還愚、感謝、精進・努力の精神によって優しさにみちた理想世界を実現しようというのです。自己の完成、幸福は他人の犠牲の上に築くことは出来ません。他人の幸せがあつてこそ自己の幸せが完成するので。釈尊は当時の人間差別の社会にあつて、生まれによって差別されることなく、人間平等を説かれました。法然上人もまた境遇や能力によって一部の人だけが完成するのではなく、平等に往生、覚め、生まれかわることを説かれました。この平等は自己主張をして勝ちとる平等ではなく、すでに与えられている平等です。こういったことをごさいますて、前の四つによって平等に覚めていくということです。

さらにもう一つ、六として「共に生まれかわる」「共生の精神」で、最後に「共生極楽成仏道」といって「共に生まれかわって完成します」ということで、もう一つの理想の実現です。共生とは一般的に共に生きるという意味に用いられ、共に助けあつて、また足りないところを補いあつて生きることとして受けとめられます。確かにそれはそれで良好な生き方を示すので、これに異存を称えるものではありません。しかし仏教は覚めを説きますから、単に助けあうというより、共に真の人間として覚め、生まれかわることではなりません。共に生き共に生まれかわることはお互いの存在の確認も大切なことであり、仏と私、他の人と私、自然と私の呼び呼ばれる関係によ

つて相乗的なはたらきが生じ、人間力を高めることになっていきます。そこには全てに対する暖かい心がなければなりません。自己に敵しい人は他人にやさしく暖かい心を持ちますが、自己に甘い人は他人に敵しく冷たい心になります。法然上人は大変自己に敵しい人ですが、人には大らかな態度で接しられました。お互いの存在があつてこそ自分であり、全てのものに対する配慮の心があつてこそ人類の福祉や平和な世界の実現になっていきます。宗教の問題というのは、例えばバスや電車に乗って弱者に席を譲つてあげる。譲らない人は当然道德の世界にも至りません。もし譲つたことにより、私は良い事をしたというふうに思っている世界は道德の世界で、まだ宗教の世界にはなりません。それが宗教の世界に高められるためには、私はこの人のおかげでさせていただいた、自分の覚めの一つの実践のためにさせていただいたのだという、この人がおられなかつたら覚めの機会を持たなかつた、そういう気持ちで席が譲れたら、それはまさに宗教の世界に入っていくことになるかと思ひます。そうなるとしてあげたのではなく、させていたのだということになり、宗教の世界に入ります。

佛敎大学で学ぶ人たちが真剣に自己を見つめ、共に生まれかわつて、各学科で学ぶ種々の学問を通して、社会において力強い歩みの出来る人間力を備えた活動力ある人として成長していただき、社会において活動していただくということを期待したいためにこういつたことを申し上げていることとさせていただきます。ご清聴いただきましてありがとうございました。